単元の言語活動７

歴史を再発見し、随筆を書く

活動のねらい

単元７の教材は、いずれも「歴史とのつながり」という観点に基づいて考えを深めることができる。過去の出来事や事跡を、現代を生きる私たちがどのように受け止め、新たな発見をしていくことができるのか、生徒達に考えを深めてもらうための教材として位置づけることができよう。

今回の課題では、歴史を再発見することの意義、ひいては、古典の作品が現代に至るまで先人達によって伝えられてきたことの意義について、生徒に考えてもらうことを目的とする。

現代の視点から歴史を見つめる際、それは過去の歴史をあるがままの姿で再現しようとするのではなく、時に美化したり、大げさに描写したりするなど、しばしば「作為的」な改変がなされるのではないだろうか。たとえば、『おくのほそ道』「平泉」の文章には、引用や技巧を駆使した表現が散見され、それらは時に事実とは異なる「作為的」な描写にすらなる。例えば、義経主従の功名一時のむなしさ、藤原三代の栄耀のはかなさに強い感動を覚えた芭蕉は、「時の移るまで泪を落し侍りぬ」と記しているのだが、一方で『曾良旅日記』の叙述を調べてみると、実際の平泉滞在は数時間に過ぎなかったと記録されており、「時の移るまで」という表現はいささか大仰であるといえよう（竹下義人「過去との対話『おくのほそ道』」『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 古典編4』二〇〇三年、右文書院）。また、「夏草や兵どもが夢の跡」の「夏草」についても、杜甫の詩を援用した「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」、あるいは「功名一時の叢となる」などといった表現から導き出された描写であり、芭蕉が実際に見た印象を忠実に再現したものとは限らない。つまり、「平泉」の文章は、芭蕉の感動がその場で即時的に結晶化したものではなく、長い時間をかけて推敲を重ねた末に生み出された「作為的」な表現だと考えられるのである。

では、自分が見たままの感動的な風景を再現するのではなく、事実とは異なる「作為的」な表現を生み出すことに一体どのような意味があるのだろうか。恐らく、自己の体験や感動を多くの人々と共有したいと願うとき、体験や感動を忠実に再現するのではなく、それまでに蓄積された知識や表現に依拠することがあるのではないだろうか。旅という極めて個人的な体験の中で眼にした風景への感動を多くの人々と共有するために、奥州藤原氏をめぐる激戦の地という歴史的背景が示されることで、実際の風景を眼にしていない人々にも荒涼とした古戦場の情景がリアルに想像されるのである。

夏草の生い茂った何の変哲もない荒野の風景が、歴史的背景を知ることで一変し、新しい見方が生まれてくるという点について、生徒に説明することができるのではないだろうか。歴史的知識を背景に据えながら過去の表現に寄り添うという行為には、風景への感動をより多くの人と共有するための機能があるのだろう。こうした表現の「作為性」は、多くの人々の想像力を喚起し、感動を共有するためのテクニックとして理解することができるのではないだろうか。

タイトル・序文の解説

「歴史を再発見」するという表現は、前述の通り、過去の歴史的な出来事や事跡を、現在においてどのように継承しながら、新しい発見をすることができるのか、考えを深めてもらいたいという意図によるものだ。

また、発見したことをどのように表現するか、という点についても、生徒達に関心を持ってほしいと考える。そのため、内容を比較的自由にまとめることができる随筆という形式でまとめるという課題を設定した。

「課題」の解説

課題　関心を持った古跡や伝統行事を題材として、随筆を書いてみよう。

前述の通り、生徒達が過去の歴史の意義を現代の側から再発見することの面白さを知ってもらうことが、この単元の最大の狙いであるが、具体的な課題としては、生徒達に関心のある古跡や伝統行事について調査してもらうという作業を設定した。

歴史に関心のある生徒は、各自の興味に沿って調査を進めてもらえればよいのだが、あまり歴史に関心の無い生徒達には、住んでいる地域の古跡や伝統行事について調べるという方向性についても場合によってはアドバイスし、聞き取り調査も含めた様々な方法論を紹介してもよいだろう。『玉勝間』「田舎に雅言の残ること」とも関連させながら、フィールドワークの方法論や魅力などについても考えを深めてもらいたい。

「活動」の解説

1　古跡や伝統行事に関する体験談や知識について話し合ってみよう。　知技⑴ア

①　グループを作り、旅行などで古跡を訪れたり、地域の伝統行事に参加したりしたときの体験について話し合う。

②　実体験以外にも、古跡や地域の伝統行事について知っている事例があれば、互いに教え合う。

2　古跡や伝統行事を一つ選び、グループで調査してみよう。　思判表A⑴ア

①　グループで話し合った古跡や伝統行事の事例の中から一つを選び、その歴史的背景を調べる。

・古跡の場合は、その場所で起きた歴史的な出来事や事件、現在の様子について調べる。
・伝統行事の場合は、起源、現在までの継承の過程や方法などについて調べる。
・書籍だけではなく、写真資料やパンフレット、インターネットなどを活用する。
・古跡の保存や再現、伝統行事の継承事業に関わっている人からの聞き取り調査などを行ってもよい。

②　調査の成果をまとめる。

3　各自で、随筆を書いてみよう。

思判表A(1)イ

①　2の調査をもとに下書きをする。

・調査したことをわかりやすくまとめる。最初から整った文章を書こうとするのではなく、箇条書きから始めてもよい。
・なぜそのテーマを選んだのかが分かるように、動機やきっかけを書く。
・調査の前と後で、どのように見方が変わったのかなどを書く。

②　推敲する。

・タイトルを工夫する。読み手の興味を引くような言葉を選ぶ。倒置法、体言止めなどの修辞を用いてもよい。
・文章の構成を工夫する。もっとも伝えたいことを文章のどこに配置するのが効果的かを考える。
・文体を工夫する。ですます体か、である体か、自分の伝えたいことに合う文体を選ぶ。

③　清書する。

・誤字脱字がないか、文体は一致しているか、確かめる。
・全文を通読して、自分の伝えたいことが表現できているか、確かめる。

④完成した文章をグループ内で読み合う。

主態

・文章表現に関してよかったと感じた点や、内容面について特に関心を持った点などを話し合う。

一定の分量の文章をまとめることが難しい場合には、活用の内容を若干変更してもよいだろう。「昔の事跡について調べ、現在の状況との違い」をまとめたうえで、「現在に至るまでにどのような変化があったか」「その変化について知ることで、どのような感想を抱いたか」という点を議論してもよいだろう。

非常に難しい課題であるので、生徒の関心や状況に合わせて、負担感が大きくなりすぎないように調整する必要があるだろう。

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕A⑴ア「書くこと」において、自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にしている。
〔思考力・判断力・表現力等〕A⑴イ「書くこと」において、自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫しているか、確認する。
〔主体的に学習に取り組む態度〕進んで時間の経過や地域による言葉の変化について理解し、古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わい、今までの学習を生かして、関心を持った古跡や伝統行事を題材とし、自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫して、随筆を書こうとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕A⑵ア

（小林　俊洋）